

2014年度 第6回 全体研究会

- 報告題目：明治新仏教前史—菊池謙讓をめぐって—
- 報告者：藤原正信（龍谷大学文学部教授）
- ファシリテーター：桂 紹隆（龍谷大学文学部教授，BARCセンター長）
- コメンテーター：碧海寿広（BARC 博士研究員）
- 開催日時：2014年12月2日（火） 17:00～19:00
- 開催場所：龍谷大学大宮学舎西翼2階大会議室
- 参加者：22人

【報告のポイント】

藤原正信氏は、明治の新仏教運動の源流のひとりである菊池謙讓の前半生とその仏教改革論について検討した。菊池は、明治中期に「本願寺破壊」論を唱えるなどの注目すべき活動を行ったが、従来の研究史では埋もれていた。本報告では彼の歴史的意義を明らかにするとともに、近代日本の国家神道と菊池の思想との関連性も指摘された。

【報告の概要】

菊池謙讓（1870-1953）は、明治中期において古河老川らとともに仏教改革運動を推進した重要な人物だが、現在のところあまり知られておらず、先行研究もほぼ皆無である。藤原氏は、この菊池を明治後期の代表的な仏教運動である新仏教運動の先駆者のひとりとして位置づける視点から、その前半生を辿るとともに、彼の思想の内実について考察した。

菊池は従来、「朝鮮で活動したジャーナリスト」として関連書にわずかに言及される程度で、辞書類での記載はなかった。小林康達の『七花八烈—明治の青年 杉村広太郎伝—』（2005年，現代書館）によって、浄土真宗本願寺派普通教校に入学してから朝鮮に渡るまでの事情がようやく明らかになり、今回報告された藤原氏の研究もその延長上にある。

熊本県の本願寺派寺院の次男として出生した菊池は、熊本におけるキリスト教浸潤の防遏を期待されて、1887年に京都の普通教校に入学した。入学当初は、同校生徒による「禁酒進徳」

を掲げた活動である反省会には関心を示さず、同志社に出入りするなどしていた。だが同校の先輩である古河老川の知己を得た後、反省会に正会員として入会した。

その後、普通教校の廃止と大学林の設置により学生による自由な活動が抑制される傾向が強まると、1889年に菊池は古河とともに上京し、東京専門学校に入学した。そして古河が上京後にその結成を主導した仏教青年協会に、菊池は委員として選出された。「旧仏教」に対する批判と「新仏教」の開発を説く中西牛郎の『宗教革命論』（1889年）の影響下にあった同会は、「仏教復活の時来れり」という現状認識のもと、社会の進化に併行する仏教改革の促進を目指した。菊池も同会に参加しながら仏教改革の論説を『反省会雑誌』などに発表し、現状の仏教界に見られる運動の主体性の欠如を批判したが、自身の具体的な改革案を示すには至らなかった。

菊池はまた、古河とその親友である杉村楚人冠とともに木蟬会や青年文学会を結成し、一時的に文筆活動にも傾斜した。だが自らの文才に限界を感じ、以後は「政治」を志すことを決意した。

上京から2年を経た1891年、菊池は仏教改革の具体案を提示し始めた。仏教婦人会の設立や、青年男女が「仏陀の福音を聞く」ための教会堂の開設、海外布教などがその具体例だが、1892年に出版された著書『本願寺論』で展開された「本願寺破壊」論は、その中でも最も注目すべき提案であった。法主の世襲制度を否定し、「平民的信仰」に基づく本山・末寺・檀徒間の関係が平等な真宗教団の再建を唱えたその論は、中西すら主張しなかった論旨で、当時の仏教改革論の中でも際立っていた。彼のそうした議論の思想的根拠としては、日本においては天皇のみが唯一神聖な存在であって、その他の人間にはいかなる神聖性も認められず皆平等であるという、天皇制神学を受容した理論が示されていた。

「本願寺破壊」論は、敷衍すれば皇室の否定にもつながりうるなどとして批判され、古河にも不評を買った。藤原氏は、菊池の論はあくまでも真俗二諦を前提とした上で法主さえも俗諦領域におくものであり、国家神道には従属するものであったと結論した。

そして、早世した古河の業績、とりわけ彼の論文「懐疑時代に入れり」が杉村によって新仏教の起源として評価され語り継がれていったこともあり、菊池の論は顧みられることはなくなった。こうして菊池の仏教改革論を埋もれさせた新仏教運動およびその研究史には、ある種の制約がかかってきたのではないかと、とも指摘された。

【議論の概要】

碧海氏は、今回の報告は、既存の新仏教運動研究の中で位置づけがされてこなかった菊池の活動についての研究として、大きな意義を有するものであると述べた上で、以下のように質問を行った。菊池の友人であった古河や杉村は、ユニテリアンとの関係が深かったが、菊池の場合はどうか。菊池の「本願寺破壊」論は、明治前期からの本願寺派の改革運動との関連性を有するのか。菊池の思想は、次世代の新仏教徒たちにどう継承されたのか。

藤原氏はこれらに答えて、菊池は前半生にたびたびキリスト教に接近しておりその影響下にあったが、1895年の論文でユニテリアンを批判し杉村と仲違いしていること、明治前期の議論との連続性と断絶については今後の検討課題であること、菊池の仏教論はその後の新仏教運動の体制化や状況追隨的な傾向と関連しているのではないかと述べた。

会場からは、菊池と国家神道との具体的な関係や、菊池における真諦の実相などについて問われたのに対し、藤原氏は、神社参拝等については不明だが、教育や諸宗教が国家神道を支持する当時の状況から菊池も自由ではなく、また菊池は自己の真諦論を明確に示さなかったが、それは僧侶の読経のような次元とは異なるものであったと回答した。

